

公開シンポジウム
(11 月 5 日 (土) 午後)

<公開シンポジウム>

英語の常識・世界の言語の非常識：

英語学の知見が個別言語の研究に与える正の影響と負の影響

(Common knowledge in English is not always common in world languages:

The positive and negative effects of English linguistics on the study of individual languages)

大谷 直輝 (OTANI Naoki)

東京外国語大学 (Tokyo University of foreign Studies)

-言語学の南北問題-

孤立語の特徴を説明するのに、「文法範疇としての、名詞の性、数、格の区別や、動詞の活用、法、時制の対立がない。形態論でいう接辞がない。更には、品詞の区別がない、あるいは文法そのものがない」などと、いわばあるべきものが、どういうわけか存在しないという、消極的な定義しかされてこなかった。(中略) 言語学が成立し、発展を遂げてきたのが、主にインド・ヨーロッパ諸言語の話されている地域であったために、言語学的な言語観には、文法即ち活用表という、いわば「北の論理」、あるいは偏見が、どこかに根強く残っているのだ。そのような見方をすれば、活用表を作る必要のない、タイ語、カンボジア語、ベトナム語、中国語などの孤立語に、(狭義の) 文法が存在しないと見えるのも、無理もないことである。(峰岸 1988: 90)

1. シンポジウムの背景と趣旨

現在、英語は言語学における実質的な共通言語となり、個別言語に関する知見を共有する際に用いられるだけでなく、英語の研究から発展した概念や理論が、個別言語を考察する際の前提や記述装置として広く共有されている。共通の概念や理論を用いることで、言語間の比較が容易となり、世界の様々な言語における普遍性や相対性が明らかになる。一方で、6000 から 8000 あるとされる言語の 1 つに過ぎない英語から一般化された概念や理論が言語の常識とされ、個別言語の分析や言語の比較を行う際の(暗黙の) 基準となることへの懸念が英語学を含む多くの研究コミュニティに存在する。

そこで、本シンポジウムでは、コイサン諸語、ドイツ語、ロシア語、マレー語、タガログ語、ラマホロット語の具体的な現象の分析を通して、英語学における概念や理論が各言語の分析にどのような影響を与えているかを紹介する。特に、各講師が実際に個別言語を分析する際に感じている英語学が与える負の影響を検討しながら、(i) 英語の研究から発展した概念や理論を言語の比較の指標として用いる有効性、(ii) 英語の現象だけを見て「言語」とはこうであると一般化する危険性、(iii) 英語学の知見を各言語の分析に応用する際の注意点等についても検討していく。最終的には、異なる言語を専門とする研究者間での有益な意見交換を行うと同時に、複数の言語を見ながら英語の現象や言語一般を論じる重要性について再確認する。

2. シンポジウムの内容

■ 第一発表：中川裕（東京外国語大学）

タイトル：コイサン諸語のクリック子音の音韻分析：SPE と単一音素分析の系譜

コイサン諸語は多数のクリック子音を区別する複雑な子音体系をもち、その複雑さゆえに、世界の言語において破格的な大きさの子音音素目録をもつことが知られている。この類型論的に稀な特徴は、世界の平均的な子音目録サイズをもつ英語の音韻論的研究とは関係がなさそうに見える。ところが、Chomsky and Halle (1968) *The Sound Pattern of English (SPE)*にはクリック子音の音韻表示についての議論が含まれ、これが未だに影響力をもち続けているように見える。それは、コイサン音韻論の文脈で現在も未解決の問題、すなわち、クリックが関与する子音複合体を、すべて単一の音素と分析するか、少なくとも一部を子音音素の連続と分析するかという論争に関わる。

発表では、この単一音素分析と子音連続分析の論争を踏まえて、コイサン音韻論の規模拡大と精緻化の歴史と、音韻類型論におけるコイサン子音体系の扱いを検討しながら、SPEが単一音素分析アプローチを採用したことの学問史的な意味を議論する。

■ 第二発表：藤縄康弘（東京外国語大学）

タイトル：完了時制 vs. 過去時制 — ドイツ語研究から省みる

完了時制（助動詞＋過去分詞による迂言形）と過去時制（動詞単独の屈折）との対立はドイツ語にも存在する。英語の完了時制がもっぱら「いま」および「いま」に隣接する以前（Extended Now）を指すのに対し、「いま」を含まない過去をも指示するドイツ語の完了時制は日常的に過去時制を代替する表現である。にもかかわらずドイツ語研究では、「いま」に関わるものだけでなく、純粋な過去指示も含めた完了時制の機能全体に英語の「現在完了」的図式を適用しようとする試みが目立つ。

英語学の「負の影響」とも言えるこうした姿勢に対し、本発表はドイツ語の完了時制が「現在完了」と「過去」という別個の機能を体現する両義的範疇であることを主張する。この両義性の重要な基盤としてドイツ語が英語以外の多くの言語と共有しているアスペクトや主語にまつわる原理を紹介し、英語における完了時制・過去時制の関係をあらためて省みる材料とする。

■ 第三発表：後藤雄介（東京ロシア語学院）・宮内拓也（東京大学）・ 匹田剛（東京外国語大学）

タイトル：ロシア語において DP という機能範疇を設定する必要性

生成文法の枠組みにおいて、*the book* のような名詞句の最大投射は伝統的に名詞 N を主要部とする NP だと考えられていたが、DP 仮説の提案以来、限定詞 D を主要部とする DP が名詞句の最大投射だとする分析が一般的になった。一方、顕在的な冠詞を持たない言語においても名詞句の最大投射を DP とすべきなのかに関しては、現在も活発な議論が続いている。本報告では、英語を基に提案された DP が、顕在的な冠詞を持たないロシア語においても設定すべきかどうかを取り上げ、英語の分析がロシア語という個

別言語の分析に与えている影響を検討する。本報告では対立する2つの主張として、束縛現象及び指示代名詞・所有形容詞と形容詞の形態統語的類似性からロシア語にはDPを設定する必要性がないとの主張と、数詞句(内部)の格表示及び数詞句と動詞の一致の可変性の観点からはロシア語にもDPを設定する必要があるとの主張を紹介する。

■ 第四発表：野元裕樹（東京外国語大学）

タイトル：何を受動文と呼ぶか・呼ばないか？

学校英文法や形式主義統語論では、英語の受動文は以下の3つの性質により特徴付けられる。①対応する能動文で目的語である被動者が主語となる。②対応する能動文で主語である動作主が明示的に表現されなかったり、前置詞句として表現されるなど、背景化される。③動詞が有標の形式を取る。マレー語（マレーシア、シンガポール、ブルネイ）で伝統的に受動文とされる構文群には、上記3つの性質をすべて持つものもあれば、そうでないものもある。英語によるマレー語研究では後者を前者になるように分析したり（無形前置詞の仮定）、後者を受動文ではないとする見方（受動態とは別個の「目的語態」の認定）が浸透しつつある。そのような分析や見方の背後には、英語の受動文から逸脱する構文を受動文とは認めたくない気持ちがある可能性がある。本発表では、最低限①を満たせば受動文であると認めるのが、個別言語研究・通言語的比較の双方の上で望ましいと論じる。

■ 第五発表：長屋尚典（東京大学）

タイトル：英語と世界の言語の与格交替

英語の与格交替は、世界の言語の文法現象のなかでも最も研究されてきた現象の一つである。本発表では、そのような英語の与格交替を世界の言語の類似する文法現象と比較して位置づけるとともに、その研究成果を発表者自身の研究においてどのように活かすことができたかを紹介する。具体的には、英語の与格交替を適用態や動詞連続構文など類似する他の文法現象と比較し、英語学で明らかにされてきた与格交替の特徴とこの交替の要因がこれらの現象にも関与することを示す。さらに、私自身の研究に基づいて、孤立的特徴を持つラマホロット語(インドネシア)の与格交替、そして、「フィリピン・タイプ」と呼ばれる特殊なアラインメント体系を持つタガログ語の場所ヴォイスの分析を紹介する。英語学が明らかにしてきた与格交替の知見は世界の言語の類似する文法現象の分析に有効である。

3. 英語（学）の個別言語の研究に対する影響例

シンポジウムの各講師の発表では、英語の研究から発展した概念や理論が個別言語の研究に大きく影響を与えている点を指摘する。英語（学）が個別言語の研究に与える良い影響の報告例には以下のようなものが含まれる。

- ① 知識や新しい発見を共有する際の手段として英語が活用されている。
- ② 自身の研究内容を国際的に発信する際の手段として用いることができる。
- ③ 言語の音韻・形態・文法・意味等を記述したり比較したりする際の装置に英語

(学)の知見を強く取り込んだ概念(テンス、アスペクト、モダリティ、ヴォイス、イントネーション、など)が広く用いられている。

- ④ 音韻論・形態論・統語論・意味論・語用論等の様々な部門の言語理論(生成音韻論、分散形態論、生成統語論、認知言語学、関連性理論など)の多くが英語(学)の知見に基づいている。
- ⑤ 英語(学)の研究から発展した記述装置や理論を適用することで、これまで注目されていない現象が発掘されたり、現象に対する理解が促進される。

言語学では、伝統的に、ギリシア語・ラテン語の文法、ウィリアム・ジョーンズの言語比較の手法、国際音声字母(IPA)などが、複数の言語を比較する際の客観的な物差しとしての役割を担ってきた。しかし、近年の英語(学)の隆盛によって、英語(学)に基づく物差しが個別言語の分析に導入されたり、伝統的に使用されている物差しが、英語(学)の知見に基づいて精緻化されることが多くなっている。個別言語を研究する際や、言語を比較対照する際に、複数の現象を客観的な基準で記述するための概念や理論が必要となることを考慮すると、個別言語の研究に対して、比較のための物差しや、情報共有の手段を提供しているという点で、英語(学)の貢献は大きいと言える。

一方、シンポジウムの講師は、英語(学)の研究から発展した概念や理論が、客観的な基準として個別言語の分析に用いられる負の影響も指摘する。以下に例を挙げる。

- ⑥ 個別言語が持つ特徴(魅力)が、英語を前提とした(暗黙の)物差しを通して分析することによって、失われる可能性がある。
- ⑦ 複数の記述装置や理論の中で、英語の現象をうまく説明できる記述装置や理論が、個別言語を分析する際に優勢になってしまう。
- ⑧ 個別言語を実際に分析する際に、英語に近い構造を想定する方が、一般に受け入れられやすくなる。
- ⑨ 英語系の研究者は数が多く発信力が強いため、独自のコミュニティで研究が完結してしまうことも多く、反証に対しても真摯に向き合わない傾向が時折見られる。
- ⑩ 英語(学)の知見に基づく記述装置や理論の多くは、書き言葉における単文の分析に基づいているため、書き言葉に偏った「文法」が想定されていることも多い。

4. むすび

本シンポジウムでは、各講師が、個別言語の研究に対して英語(学)が与えていると感じる様々な影響をざっくりと報告する。ただし、個別言語の研究者から英語学の研究者へ一方向の報告をするだけでなく、報告後には、十分な時間をフロアとの質疑応答に費やすことで交流を行い、指摘された点の妥当性についても検討をする。本シンポジウムでは、英語学の研究が、英語学にとどまらず、様々な面で深く個別言語の研究に影響を与えている現状を確認しながら、英語学と個別言語の研究者で意見交換をすることで、今後も続く幅広い交流に向けて、互いの理解を深めることを目的とする。

(参考文献)

峰岸真琴(1988)「屈折も活用もない言語－タイ語」『言語』第17巻8号 pp.90—95. 大修館書店。

コイサン諸語¹のクリック子音の音韻分析：SPE と単一音素分析の系譜² (SPE and Khoisan linguistics: unit vs. cluster analyses of clicks)

中川裕 (NAKAGAWA Hiroshi)
東京外国語大学 (Tokyo University of Foreign Studies)

- 英語音韻論がコイサン音韻論に与えた影響はあるか？
・ありそうだ。
- 何によるどんな文脈への影響か？
(1) SPE, i.e., Chomsky & Halle (1968: 319–322), による
(2) いまも未解決のコイサン音韻論における論争への影響。
- その論争とは？
・複雑なクリック子音に代表される高度複雑子音の分析法の対立。

単一音素分析: Beach (1938)以来の伝統; SPE, Sagey (1986), etc.; UPSID & WALS。
vs.

子音連続分析: Traill (1985)以来のもうひとつの伝統。【7 節の年表参照】

- 両分析の違いは？ (例: 高度複雑クリック子音[!χ], [!qχ']をどう分析する?):

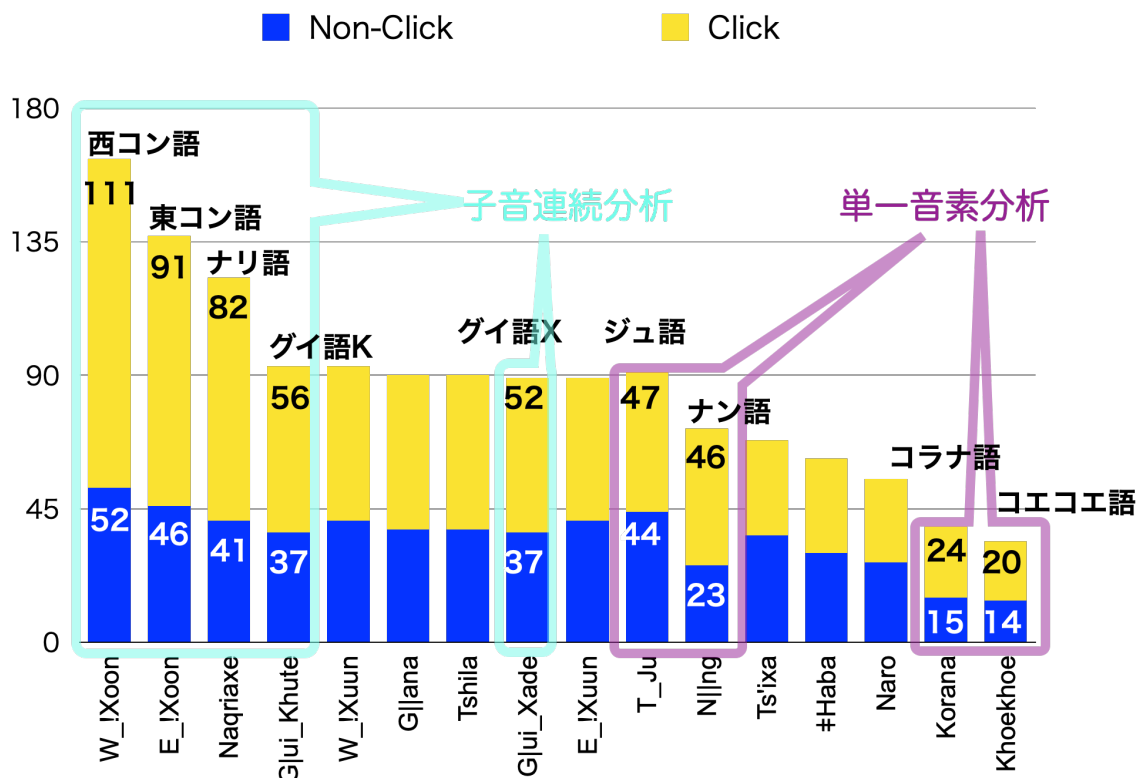
音声表示	単一音素分析	子音連続分析
[!χ]	/!x/	/!/ + /χ/
[!qχ']	/!qχ'/	/!/ + /qχ'/

- SPE の見解は？ その拠り所となるデータは？ その性質は？
(1) 単一音素分析を採用。
(2) Beach (1938)のコラナ語とコエコエ語の記述に基づく。
(3) コラナ語とコエコエ語は KBA 諸語で最も子音目録が貧弱。【6 節(3)参照】
- ふたつの分析の流派がそれぞれ拠り所とするデータの性質は？
(1) 単一音素分析派：高度複雑子音が比較的少ない。
(2) 子音連続分析派：高度複雑子音が比較的多い。

¹ 本発表で話題にするコイサン諸語は、カラハリ盆地言語地帯 Kalahari Basin Area (KBA)と呼ばれる地域の言語群で、アフリカ南部の非バントゥの先住 3 語族 (Kx'a, Khoe-Kwadi, and Tuu) の総称 (Güldemann 1998, 2014)。30 余言語が現存。本発表では KBA の略称を併用する。

² 本発表は JSPS 科研費 (課題番号 22K18249, 20H00011, 18KK0006, 18K18500) の助成を受けている。

(3) KBA 諸語の子音目録規模と両分析が扱っている言語



7. クリック子音分析年表 (青=単一音素、橙=子音連続；数字=クリック数)

記述	理論	類型論
Beach (1938) 20		
Snyman (1969, 1975) 48	SPE (1968)	
Traill (1985) 80	Sagey (1986)	Maddieson (1984)
Miller-Ockuizen (2003) 47	Güldemann (2001)	
Nakagawa (2006) 52		
Miller et al. (2007, 2009) 46	Miller (2011)	
Naumann (2016) 111		Maddieson (2013a,b)
Gerlach (2016) 82	Güldemann & Nakagawa (2018)	
	Nakagawa et al. (2019)	
	Bennett (2020)	

- (1) 単一音素分析派は SPE の流れを汲む研究が大多数。
- (2) Maddieson の音韻類型論 (UPSID, WALS) も単一音素分析。

8. KBA クリック子音表 (Güldemann & Nakagawa (2018)の子音連続分析。
 1 音素を複数字で表記。行 1–9 の各セル内の表記はすべて単一音素。)
 (1) 行 10–23 の高度複雑子音は子音連続と分析される。
 (2) 行 10–23 では黒字が子音連続の第 1 音素 **C1**、茶色字が第 2 音素 **C2**。
 (3) 単一音素分析では全セル内の表記が単一音素をなすことになる。

1	voiceless unaspirated	ɔ	l	!	ɬ	ll
2	voiced unaspirated	gɔ	gl	g!	gɬ	gll
3	voiceless aspirated	ɔ ^h	l ^h	! ^h	ɬ ^h	ll ^h
4	voiced aspirated	gɔ ^h	gl ^h	g! ^h	gɬ ^h	gll ^h
5	voiceless ejective	ɔ'	l'	!'	ɬ'	ll'
6	voiced ejective	gɔ'	gl'	g!'	gɬ'	gll'
7	voiced nasal	ɲɔ	ɲl	ɲ!	ɲɬ	ɲll
8	voiceless nasal	ɺɔ	ɺl	ɺ!	ɺɬ	ɺll
9	preglottalized nasal	ʔɲɔ	ʔɲl	ʔɲ!	ʔɲɬ	ʔɲll
10	voiceless unaspirated + h	ɔ ^h	l ^h	! ^h	ɬ ^h	ll ^h
11	voiced unaspirated + h	gɔ ^h	gl ^h	g! ^h	gɬ ^h	gll ^h
12	voiceless unaspirated + ʔ	ɔʔ	lʔ	!ʔ	ɬʔ	llʔ
13	voiced unaspirated + ʔ	gɔʔ	glʔ	g!ʔ	gɬʔ	gllʔ
14	voiceless unaspirated + x	ɔ ^x	l ^x	! ^x	ɬ ^x	ll ^x
15	voiced unaspirated + x	gɔ ^x	gl ^x	g! ^x	gɬ ^x	gll ^x
16	voiceless unaspirated + q ^{x'}	ɔ ^{qx'}	l ^{qx'}	! ^{qx'}	ɬ ^{qx'}	ll ^{qx'}
17	voiced unaspirated + q ^{x'}	gɔ ^{qx'}	gl ^{qx'}	g! ^{qx'}	gɬ ^{qx'}	gll ^{qx'}
18	voiceless unaspirated + q	ɔ ^q	l ^q	! ^q	ɬ ^q	ll ^q
19	voiced unaspirated + q	gɔ ^q	gl ^q	g! ^q	gɬ ^q	gll ^q
20	voiceless unaspirated + q ^h	ɔ ^{qh}	l ^{qh}	! ^{qh}	ɬ ^{qh}	ll ^{qh}
21	voiced unaspirated + q ^h	³	gl ^{qh}	g! ^{qh}	gɬ ^{qh}	gll ^{qh}
22	voiceless unaspirated + q'	ɔ ^{q'}	l ^{q'}	! ^{q'}	ɬ ^{q'}	ll ^{q'}
23	voiced unaspirated + q'		gl ^{q'}	g! ^{q'}	gɬ ^{q'}	gll ^{q'}

³ ふたつの灰色の空欄は未確認の音。

9. 単一音素分析の大問題「行 10–23 はどんなタイプの複雑子音音素か？」

- (1) Maddieson (1984) “velarized” and “fricated” for 14–17.
- (2) Miller-Ockhuizen (2003) “uvularized” for 14–15, “epiglottalized” for 16–17.
- (3) Miller et al. (2007, 2009) “airstream contour segments”:
 “linguo-pulmonic” for 10–15 and 18–21.
 “linguo-glottalic” for 16–17 and 22–23.

(Note: lingual airstream = velaric ingressive airstream.)

Note: (1) (2)はアドホックな範疇で、記述している言語の体系さえ捉えきれていない。(3)は “airstream contour” という概念自体に理論的問題 (Güldemann & Nakagawa 2018) と類型論的問題 (11 節参照) がある。また、(1) (2) (3)のいずれも高度複雑子音の多い KBA 諸語の記述には妥当ではない。

10. 論争で議論された両分析の有効性についての主な視点は？

- (1) 音声学
 音響・聴覚音声学的事象の数 (e.g. ! = one event; !q = two separate events)
 C2 と独立音素の音声的同一性 (e.g. [q] in [!q] = independent /q/ [q])
- (2) 音韻論
 C2 と独立音素の含意関係 (e.g. !q implies /q/)
 高度複雑クリック子音の音韻表示問題 (What type of “-ization”?)
 歴史的音変化：同一変化が C2 にも独立音素にも起きる。
 Cf. *!qχ' > !ʔ & *qχ' > ʔ in Korana (Traill 1985: 211)
- (3) 類型論
 子音連続の類型論： obstruent-obstruent as only cluster type
 子音目録規模の類型論：子音連続分析による再計測の新知見

11. ふたつの分析の比較の結果は？ (現状)

説明/一貫性	子音連続分析	単一音素分析 “airstream contour”	単一音素分析 “uvularization” & “epiglottalization”	単一音素分析 伝統的記述
音声学	YES	(YES)	NO	YES
音韻論	YES	NO	NO	(NO)
類型論	YES	NO	NO	NO
KBA 固有特徴	obstruent- obstruent as only cluster type	contours of airstream	uvularization & epiglottalization	?

12. 議論：コイサン音韻論の発達に SPE が与えた影響は何だったのだろうか？

References

- Beach, Douglas M. 1938. *The phonetics of the Hottentot language*. Cambridge: Heffer and Sons.
- Bennett, Wm. G. 2020. Click phonology. In Bonny Sands, *Click consonants*, 74–128. Leiden: Brill.
- Chomsky, Noam and Morris Halle. 1968. *The sound pattern of English*. New York: Harper & Row.
- Gerlach, Linda. 2016. *N!aqriaxe: the phonology of an endangered language of Botswana*. Asien- und Afrika-Studien der Humboldt-Universität zu Berlin 47. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Güldemann, Tom. 1998. The Kalahari Basin as an object of areal typology – a first approach. In Mathias Schladt (ed.), *Language, identity, and conceptualization among the Khoisan* (Research in Khoisan Studies 15), 137–196. Cologne: Rüdiger Köppe.
- Güldemann, Tom. 2001. *Phonological regularities of consonant systems across Khoisan lineages*. University of Leipzig Papers on Africa, Languages and Literatures 16. Leipzig: Institut für Afrikanistik, Universität Leipzig.
- Güldemann, Tom. 2014. “Khoisan” linguistic classification today. In Tom Güldemann & Anne-Maria Fehn (eds.), *Beyond ‘Khoisan’: Historical relations in the Kalahari Basin*, 1–41. Amsterdam: John Benjamins.
- Güldemann, Tom and Hiroshi Nakagawa. 2018. Anthony Traill and the holistic approach to Kalahari Basin sound design. *Africana Linguistica* 24: 45–73.
- Maddieson, Ian. 1984. *Patterns of sounds*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Maddieson, Ian. 2013a. Consonant inventories. In Matthew S. Dryer & Martin Haspelmath (eds.), *The world atlas of language structures online*. Leipzig: Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology. (<http://wals.info/chapter/1>)
- Maddieson, Ian. 2013b. Presence of uncommon consonants. In Matthew S. Dryer & Martin Haspelmath (eds.), *The world atlas of language structures online*. Leipzig: Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology. (<http://wals.info/chapter/19>)
- Miller, Amanda L. 2011. The representation of clicks. In Oostendorp, Marc van et al. (eds.), *The Blackwell companion to phonology*, 416–39. Oxford/Chichester: Wiley-Blackwell.
- Miller, Amanda L., Johanna Brugman and Bonny E. Sands. 2007. Acoustic and auditory analysis of N!uu lingual and linguo-pulmonic stop bursts. In Proceedings of the International Congress of Phonetic Sciences XVI, Saarbrücken, Germany, August 2007, 769–772.

- Miller, Amanda L., Johanna Brugman, Bonny Sands, Levi Namaseb, Mats Exter, Chris Collins. 2009. Differences in airstream and posterior place of articulation among Nluu lingual stops. *Journal of the International Phonetic Association* 39,2: 130-161.
- Miller-Ockhuizen, Amanda L. 2003. *The phonetics and phonology of gutturals: A case study from Jul'hoansi*. London: Routledge.
- Nakagawa, Hiroshi. 2006. Aspects of the phonetic and phonological structure of the Glui language. Ph.D. thesis: Department of Linguistics, University of the Witwatersrand.
- Nakagawa, Hiroshi, Tom Güldemann, Florian Lionnet, and Alena Witzlack-Makarevich. 2019. Khoisan phonological typology database and the relative frequencies of consonants in the Khoisan languages, 13th Conference of the Association for Linguistic Typology, University of Pavia, Italy.
- Naumann, Christfried. 2016. The phoneme inventory of Taa (West !Xoon dialect). In Voßen and Haacke (eds.), *Lone Tree scholarship in the service of the Koon: essays in memory of Anthony T Traill*, 311-351. Köln: Rüdiger Köppe.
- Sagey, Elizabeth Caroline. 1986. The representation of features and relations in non-linear phonology. PhD Dissertation: Department of Linguistics and Philosophy, Massachusetts Institute of Technology.
- Snyman, Jan W. 1970. *An introduction to the !Xũ (!Kung) language*. Communications of the School of African Studies 34. Cape Town: A. A. Balkema.
- Snyman, Jan W. 1975. *Žul'hōasi fonologie & woordeboek*. Communications of the School of African Studies, University of Cape Town 37. Cape Town: A. A. Balkema.
- Traill, Anthony. 1985. *Phonetic and phonological studies of !Xóõ Bushman*. Quellen zur Khoisan-Forschung 1. Hamburg: Helmut Buske.

完了時制 vs. 過去時制 — ドイツ語研究から省みる (Perfect vs. past tense – from a German linguistic point of view)

藤縄 康弘 (FUJINAWA Yasuhiro)

東京外国語大学 (Tokyo University of Foreign Studies)

1. はじめに

[英語の事実]

・英語の完了時制には「いま」との関連性を含意する時間規定 (now 型: e.g. *already, today*) しか許されない。「いま」と接点のない「以前」を指す時間規定 (yesterday 型: e.g. *yesterday, last year*) は過去時制にしか現れない (König 1994: 542) :

- (1) a. I **have already had** breakfast.
- b. I **have not had** breakfast *today*.
- c. *I **have not had** breakfast *yesterday*.
- d. I **did not have** breakfast *yesterday*.

[英語の常識]

・Reichenbach (1947: 287ff.) が英語を例に発話時 (point of speech, S), 事象時 (point of event; E) に加えて参照時 (point of reference; R) を導入して時制を分析。この分析が今日 (英語に限らずさまざまな言語の) 時制論の出発点 :

(2) a. 現在時制	$\boxed{S, R}, E$	}	[present]
b. 完了時制	$E - \boxed{S, R}$		
c. 過去時制	$E, \boxed{R - S}$	}	[past]
d. 過去完了時制	$E - \boxed{R - S}$		

⇒ ひとつの時制形態にひとつの意味が対応する

[ドイツ語の事実]

・迂言的な完了時制を有する他の言語同様 (Comrie 1985: 77ff.), ドイツ語では完了時制が now 型だけでなく yesterday 型の時間規定も許容する :

- (3) a. Ich **habe schon gefrühstückt**.
I have already have.breakfast.PP
もう朝食を食べた
- b. Ich **habe heute nicht gefrühstückt**.
I have today not have.breakfast.PP
今日, 朝食を食べていない
- c. Ich **habe gestern nicht gefrühstückt**.
I have yesterday not have.breakfast.PP
昨日, 朝食を食べなかった

d. Ich **frühstückte** *gestern* nicht.

I had breakfast yesterday not

昨日, 朝食を食べなかった

[本発表の問い]

- ・ドイツ語の完了時制に *yesterday* 型の時間規定が可能になる仕組みは？
- ・完了時制に取って代われつつある過去時制の存在意義は？
- ・ドイツ語の分析が英語（ベース）の言語学に示唆することは？

[用語法]

- ・表現（形式） 現在時制, 完了時制, 過去時制, 未来時制, ...
- ・表現内容（用法, 読み） present, perfect¹, past, future, ...

2. ドイツ語の完了時制（特に past 読み）

[先行研究の基調]

- ・現在時制が present (progressive) のほか future も意味するドイツ語では, [S, R] を「R が S に先立たない（つまり, S = R または S — R）」と再定義の上, 完了時制に英語と同じ図式を適用（Ballweg 1988, Ehrich and Vater 1989, Klein 1994, 1999, Thieroff 1994, ...）:

(4) a. Petra **singt** {*jetzt (gerade) / morgen*}. 現在時制

P. sings (right) now tomorrow

ペトラは {いま (ちょうど) 歌っている / 明日歌う}

b. 基本義: [S, R] & [E, R] → present (progressive) または future

(5) a. {*Jetzt / Morgen*} **habe** ich das Buch (schon) **gelesen**. 完了時制

now tomorrow have I the book already read.PP

{いまは / 明日には} 本を (すでに) 読んでいる

b. 基本義: [S, R] & [E — R] → present perfect または future perfect

- ・完了時制が *yesterday* 型の時間規定を許すわけを過去完了時制との並行性に帰す:

(6) Ich **hatte** das Buch *gestern* **gelesen**. 過去完了時制

I had the book yesterday read.PP

a. 昨日 (= 「いま」以前の R) より前に本を読んだ

b. 昨日 (= 「いま」以前の明示されていない R よりもさらに前の時間に) 本を読んだ

(7) Ich **habe** das Buch *gestern* **gelesen**. 完了時制

I have the book yesterday read.PP

a. *昨日 (= 「いま」と重なる R) より前に本を読んだ

b. 昨日 (= 「いま」と重なる明示されていない R よりもさらに前の時間に) 本を読んだ

¹ さらに下位の区分として result, experience/existential, recent past など (Comrie 1976: 56ff.)。

[疑念]

・ yesterday 型の時間規定が共起する (7b) のような事例において、本当に「いま」と重なる R が生きているのか？ その言語的証拠は？

- (8) *Jetzt, wo Karla gestern hier eingezogen ist, brauchen wir einen neuen Schlüssel*
now REL K. yesterday here move.in.PP is need we a new key
fürs Klo. (Löbner 2002: 266)
for.the toilet
カルラが昨日ここに入居したいま、トイレに新しい鍵が要る

・ (8) のように yesterday 型に加えて now 型の時間規定が明示されることが確かに可能だが、これは極めて限られた（大まかに言って）(9) の条件の下で成り立つ表現：

- (9) achievement タイプの動詞，かつ，
当該事象の結果として「いま」この場に当事者がいる・いない，という関係²

・ そうでなければ，perfect 読みと past 読みは相補的に分布（拙論 2023）：

- (10) a. *Jetzt, wo ich (*gestern) geschlafen habe, geht es mir schon besser.*
now REL I yesterday sleep.PP have goes it to.me quite better
(昨日) 睡眠をとったいま，だいぶ気分はよくなった
b. **Jetzt, wo Karla letzte Nacht um 3 Uhr noch geweint hat, bin ich müde.*
now REL K. last night at 3 o'clock yet weep.PP has am I tired
カルラがゆうべ3時にまだ泣いていたいま，私は眠い
c. *Da Karla letzte Nacht um 3 Uhr noch geweint hat, bin ich jetzt müde.*
since K. last night at 3 o'clock yet weep.PP has am I now tired
カルラがゆうべ3時にまだ泣いていたものだから，私はいま眠い

[対案]

- ・ 完了時制は一義的に ~~([S, R] & [E — R])~~ であり，そこから ~~past 読みが派生する~~
両義的な表現：[S, R] & [E — R] (perfect) または [S — R] & [E, R] (past)
・ ふたつの読みはアスペクト（＝E と R の関係）によって差異化される

3. ドイツ語の過去時制

[過去時制の衰退？]

- ・ 南部方言では「過去時制の消滅（Präteritumschwund）」が広範に進行
・ 標準ドイツ語でも，日常の口語では過去時制より完了時制のほうがはるかに高頻度。
文章語では文体論的に機能分化（Weinrich⁶2001）：

² ポイントは，この場合，文の機能が典型的な「述定」には相当せず，「存在承認・棄却」に留まるという点（cf. 拙論 2018, 2020）。

- (11) a. Ich habe gestern nicht gefrühstückt. [= (3c)] 日常的, 「論評的」
 b. Ich frühstückte gestern nicht. [= (3d)] 非日常的, 「物語的」

・ただし, (助) 動詞 (*sein* “be”, *haben* “have”, *werden* “get”, *können* “can”, *müssen* “must”, ...) では「過去時制の消滅」が進んだ方言も含めて) 過去時制の使用が普通:

- (12) *Gestern konnte ich nicht ausgehen, weil ich Fieber hatte.*
 yesterday could I not go.out.INF because I fever had
 昨日は熱があったので外出できなかった

[*sein* の振舞い]

・ *sein* の過去時制は *past* だけでなく *perfect* も意味する (Löbner 2002; 259)。しかも *experience / existential* 読み³ だけでなく *recent past* 読みも OK! :

- (13) a. Ich **war** *damals* in Japan. [past]
 I was at.that.time in J.
 私は当時, 日本にいた
 b. Ich **war** *noch nie* in Japan. [perfect (experience / existential)]
 I was yet never in J.
 私はいまだに日本に行ったことがない

- (14) a. Now I’m coming back home
 I’ve **been** away now
 Oh how I’ve **been** alone
 b. Jetzt komme ich wieder nach Hause [perfect (recent past)]
 Ich **war** *jetzt* weg
 Oh, wie ich alleine **war**
 (Ben Kweiler “Wait” 英語の歌詞原文とドイツ語による対訳;
 <<https://flowlez.com/de/songs/wait-2089893/>> 最終閲覧日: 2022/9/14)

・ *perfect* (特に *recent past*) 読みができるからといって, *sein* の過去時制も一般動詞の完了時制のように両義的, ということにはならない。というのも, 過去時制 *sein* のこの読みは (9) と (ほぼ) 同じ条件を満たしてこそ得られる (拙論 2023)

[present / future を排除しない過去時制]

・ 過去時の「見込み」表現

- (15) a. Das Haus **drohte** zusammenzustürzen. 過去時制
 the house threatened to.collapse
 建物は崩壊しそうだった

³ 英語でも, アメリカ英語では *experience / existential* 読み「(すでに) ~した (ことがある)」に過去時制が可能 (Leech and Svartvik 1975: 66)。

- b. *Das Haus **hat** zusammenzustürzen **gedroht**. 完了時制 (past 読みもアウト！)
 the house has to.collapse threaten.PP

・いわゆる「ウェイトレスの過去時制」(Comrie 1985: 20; 拙論 2023)

- (16) a. Ich **bekomme** eine Gulaschsuppe. 現在時制 (注文の際)

I get a goulash.soup
 グラシュスープを頂きます

- b. Sie **bekamen** eine Gulaschsuppe. 過去時制 (給仕の際)

you got a goulash.soup
 お客様はグラシュスープをお召し上がりでしたね

・不在相 (absentive; Groot 2000) と *gehen* “go”

- (17) a. Max **ist einkaufen**.

M. is shop.INF
 マックスは買い物に行っている (そのせいでここにいる)

- b. *Am Wochenende war* ich in Ruanda Berggorillas **beobachten** und

at.the weekend was I in R. mountain.gorillas watch.INF and

am Great Barrier Reef **tauchen** [...] (実例; 伊藤 2021 から引用)

at.the G. B. R. dive.INF

この週末、ルワンダでマウンテンゴリラを観察したり、グレートバリアリーフでダイビングしたりしているところだった

- (18) Morgen Abend **ging** erst das Schiff, [...] (実例; Fuchs 1989: 7f. から引用)

tomorrow evening left not.until the ship

明日の晩にならなければ船は出なかった

・完了時制の past 読みと異なり、過去時制の past 読みはアスペクト (E と R の関係) に依存しない。こうして [R, E] を「R=E」とも「R—E」とも解釈し得る過去時制は、後者の表現として non-past を意図し得る

・しかも、この意図の実現には (9) と (ほぼ) 同じ条件が関与する

4. おわりに

[英語 (ベース) の言語学への示唆]

・完了時制の past 読みは過去時制が non-past を指向するのと表裏一体の現象。そこには、アスペクトと述定の様式に関わる一定の条件 (9) が作用している

・この関連で、英語でも法助動詞の下で完了時制が past 読みされるという事実が重みを持つ。法助動詞はかつての過去時制の形態が現在時制に再分析された過去現在動詞：

- (19) a. John **must have already read** the book. [must: epist. / deont.; have read: perf.]

- b. John **must have read** the book yesterday. [must: epist. / *deont.; have read: past]

付記

本発表は、JSPS 科研費 JP 18H00664 の助成を受けた研究成果の一部である。

参考文献

- Ballweg, Joachim (1988): Präsensperfekt vs. Präteritum im Deutschen. In: Ehrich, V., and H. Vater. [eds.], *Temporalsemantik. Beiträge zur Linguistik der Zeitreferenz*, Tübingen: Niemeyer, pp.81–95.
- Comrie, Bernard (1976): *Aspect: An introduction to the study of verbal aspect and related problems*. Cambridge: CUP.
- (1985): *Tense*. Cambridge: CUP.
- Ehrich, Veronika, and Heinz Vater (1989): Das Perfekt im Dänischen und Deutschen. In: Abraham, W., and T. Janssen. [eds.], *Tempus – Aspekt – Modus. Die lexikalischen und grammatischen Formen in den germanischen Sprachen*, Tübingen: Niemeyer, pp.103–132.
- Fuchs, Anna (1988): Dimension der Deixis im System der deutschen Tempora. In: Ehrich, V., and H. Vater [eds.], *Temporalsemantik. Beiträge zur Linguistik der Zeitreferenz*, Tübingen: Niemeyer, pp.1–25.
- 藤縄康弘 (2018): 「複合判断と単独判断 — アントン・マルティの言語論再考」『東京外国語大学論集』97, pp.43–57. <<https://doi.org/10.15026/92830>>
- Fujinawa, Yasuhiro (2020): Pseudocategorical or purelythetic? A contrastive case study of howthetic statements are expressed in Japanese, English, and German. In: Abraham, W., E. Leiss, and Y. Fujinawa [eds.], *Thetics and Categoryicals*, Amsterdam and Philadelphia: Benjamins, pp.283–309. <<https://doi.org/10.1075/la.262>>
- 藤縄康弘 (2023): 「現代ドイツ語の時制とアスペクト — 完了時制と過去時制における参照時と事象時をめぐって —」カンミンギョン・時田伊津子・藤縄康弘 [編]『ドイツ語学への視点・ドイツ語学からの視座 — 成田節教授退職記念論集 — (仮)』東京：同学社，頁未確定。
- Groot, Caspar de (2000): The absentive. In: Dahl, Östen [ed.], *Tense and Aspect in the Languages of Europe*, Berlin and New York: de Gruyter, pp.693–719.
- 伊藤港 (2021): 「Absentiv (不在構文) の用法について」日本独文学会関東支部研究発表会での口頭発表 (オンライン).
- Klein, Wolfgang (1994): *Time in Language*. London: Routledge.
- (1999): Wie sich das deutsche Perfekt zusammensetzt. In: *Zeitschrift für Literaturwissenschaft und Linguistik* 113, pp.52–85.
- König, Ekkehard (1994): English. In: König, E., and J.v.d. Auwera [eds.], *The Germanic languages*, London and New York: Routledge, pp.532–565.
- Leech, Geoffrey, and Jan Svartvik (1975): *A Communicative Grammar of English*. London: Longman.
- Löbner, Sebastian (2002): Is the German Perfekt a perfect Perfect? In: *Sinn und Bedeutung* 4, pp.255–273.
- Reichenbach, Hans (1947): *Elements of Symbolic Logic*. Berkeley: University of California Press.
- Thieroff, Rolf (1994): Perfect and pluperfect in German. In: Vet, C., and C. Vettters. [eds.], *Tense and Aspect in Discourse*, Berlin and New York: de Gruyter, pp.99–113.
- Weinrich, Harald (⁶2001 [1964]): *Tempus. Erzählte und besprochene Welt*. München: Beck.

ロシア語において DP という機能範疇を設定する必要性*

(On whether we need to posit the functional category DP in Russian)

後藤雄介[†] (GOTO Yusuke), 宮内拓也[‡] (MIYAUCHI Takuya), 匹田剛[§] (HIKITA Go)

[†] 東京ロシア語学院 非常勤講師 (Part-time lecturer, Tokyo Institute of Russian Language)

[‡] 東京大学 大学院教育学研究科 (Graduate School of Education, The University of Tokyo)

[§] 東京外国語大学 大学院総合国際学研究院 (Institute of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies)

1. “名詞句”の最大投射をめぐる問題

- Fukui and Speas (1986/2006)や Abney (1987)等以降、*the book* のようないわゆる名詞句の最大投射は、N を主要部とする NP (1a)ではなく、D を主要部とする DP (1b)として分析されることが一般的になった。

(1) a. [NP [Det the] [N book]] b. [DP [D the] [NP book]]

- 英語のように顕在的な冠詞を持つ言語においては D を名詞句の主要部とする分析が主流となったものの、顕在的な冠詞を持たない言語の名詞句の最大投射も DP なのかについては現在も活発な議論が続いている。

⇒名詞句の最大投射が何なのかをめぐっては、主に2つ仮説がある。

(2) a. 普遍的 DP 仮説: Pereltsvaig (2007)など

当該言語の冠詞の有無に関係なく、名詞句の最大投射は DP である。

b. パラメーター化 DP 仮説: Bošković (2005, 2008, 2009)など

当該言語の冠詞の有無に応じて当該言語の DP の投射の有無が決まる。

- 顕在的な冠詞のないロシア語には DP はないと考えるべきなのだろうか、それとも英語の分析と同じように、DP の投射を想定したほうが良いのだろうか。

→例えば、ロシア語において、*kniga* 「本」という名詞句は、DP 投射のない NP (3a)と考えるのか、DP の投射があり、主要部 D は音声的に発音されない空の要素が位置する (3b)と考えるべきなのか。

(3) a. [NP [N kniga]] b. [DP [D Ø] [NP kniga]]

◇本発表の内容:

- 英語を基に提案された DP を顕在的な冠詞を持たないロシア語においても設定すべきかどうかを取り上げ、英語の分析がロシア語という個別言語の分析に与えている影響を検討する。
- 対立する2つの主張として、(i) 束縛現象及び所有代名詞・指示代名詞と形容詞の形態統語的類似性からロシア語には DP を設定する必要性がないという主張と、(ii) 数詞句(内部)の格表示及び数詞句と述語の一致の可変性の観点からはロシア語にも DP を設定する必要性があるという主張を紹介する。

2. ロシア語における名詞句の構造について

2.1 束縛現象の観点から

- Kayne (1994: 26): *John's father* 「ジョンの父」のような所有者を含む名詞句の構造に関して、空の D が PossP を補部に取り、所有者は PossP の指定部に位置すると提案(4)。

(4) [DP [D Ø] [PossP [DP John] [Poss' [Poss 's] [NP father]]]]

(Kayne 1994: 26)

* 本発表は JSPS 科研費(課題番号: JP18K00526、研究代表者: 匹田剛)の助成を受けている。

・Kayne が上記の構造¹を提案した理由は、(i) ハンガリー語やイタリア語において定冠詞が所有者に先行する事例があること、(ii) Kayne が提案する c 統御の定義から束縛現象を捉えるためである。

(5) a. X と Y が範疇であり、X が Y を排斥し、X を支配するどの範疇も Y を支配する場合、そしてその場合に限り、X は Y を c 統御する。 (Kayne 1994: 16)

b. α の断片が β を支配しない場合に α は β を排斥する。 (Chomsky 1986: 9)

(6) a. **John_i's father criticized him_i.** 「ジョン_iの父親は彼_iを批判した」

b. **His_i father criticized John_i.** 「彼_iの父親はジョン_iを批判した」

⇒主語名詞句内の所有者 *John/his* が目的語の *him/Jhon* を指す解釈として適格。

(7) a. [CP C [TP [DP [D Ø] [PossP [DP John_i] [Poss' [Poss 's] [NP father]]]] [T' T [VP criticized him_i]]]]

b. [CP C [TP [DP [D Ø] [PossP [DP His_i] [Poss' [Poss Ø] [NP father]]]] [T' T [VP criticized John_i]]]]

⇒(7a, b)にて DP *John/his* を支配する範疇は主語名詞句 DP と CP で、主語名詞句 DP は目的語の DP を支配しないため、所有者 *John/his* は目的語の *him/John* を束縛せず、適格(束縛原理 B, C に違反しない)。

・Despić (2013): 顕在的な冠詞のないセルビア・クロアチア語では上記のような英語に対応する文が非文となることを指摘し、セルビア・クロアチア語には DP がないことを主張。

・宮内 (2015), Miyauchi (2020): Despić (2013)の議論に基づき、ロシア語における束縛現象を検討。

⇒ロシア語でもセルビア・クロアチア語と同様のパターンを示すため、ロシア語にも DP がないことを主張。

(8) a. ***Ego_i** poslednij fil'm sil'no razocharoval **Kolju_i.**
his latest film-NOM really disappointed Kolya-ACC
「彼_iの最新の映画はコーリヤ_iをととてもがっかりさせた」 (Miyauchi 2018: 109)

b. ***Kolin_i** poslednij fil'm sil'no **ego_i** razocharoval.
Kolya's latest film-NOM really him disappointed
「コーリヤ_iの最新の映画は彼_iをととてもがっかりさせた」 (Miyauchi 2020: 181)

→主語名詞句内の所有者 *Ego/Kolin* 「彼の/コーリヤの」が動詞目的語の *Kolju/ego* 「コーリヤを/彼を」を指す解釈としては不適格。

◇普遍的 DP 仮説によれば、英語とロシア語とで同じ構造をなしている“はず”なのに、適格性が異なるのはなぜか。宮内の研究からは以下のことが導かれる：

(i) 英語には NP より上に PossP や DP といった投射があるが、ロシア語にはそれらの投射がないために所有者が目的語を束縛してしまい非文になる。

(ii) ロシア語において所有者は NP に付加される要素で、NP より上に PossP や DP の投射はないと考えれば、英語に対応する文がなぜロシア語では非文となるのかの説明が出来る(9)。

(9) [CP C [TP [NP [Poss His_i/Kolya's] [N' [AP latest] [N film]]]] [T' T [VP really disappointed Kolya/him_i]]]]

⇒所有者 *His/Kolya's* を支配するのは CP で、目的語の NP *Kolya/him* を c 統御し束縛するため、非文²。

¹ 正確には、Kayne (1994)では D の補部にはラベルが記載されていないため、Despić (2013)の表記にならって D の補部を PossP とする。また、Kayne (1994)の理論では、指定部は付加詞として分析されており、中間投射は句のレベル(XP)で表記されている。ただし、本発表では、表記の統一のためパーレベルの表記を用いる。

² ロシア語において、(英語の 's とは異なり) 所有形容詞は接辞によって派生する語である。よって、Kayne (1994)の理論を踏まえれば、所有者は主要部として句に付加する構造を想定せざるを得ない。

2.2 名詞の一致修飾語の観点から

- ・ロシア語において、以下の例のように所有代名詞・指示代名詞・形容詞は全て修飾する名詞の性・数・格に関して一致する。また、所有代名詞・指示代名詞・形容詞は変化語尾が類似している(10)。
- ・性・数・格に関する一致と変化語尾の類似性からは、所有代名詞・指示代名詞を形容詞とは別の統語範疇に分ける必要はないため、これらの要素は全て形容詞で NP 内の要素という分析になる(11)。

- (10)
- | | | | | | |
|--|---------------------------------|--|---------------------------------|------------------------------|------------------------------|
| a. <i>moj/ètot</i>
my/this-NOM.M.SG | <i>bol'soj</i>
big-NOM.M.SG | <i>slovar';</i>
dictionary-NOM.M.SG | <i>moego/ètogo</i>
-GEN.SG.M | <i>bol'sogo</i>
-GEN.SG.M | <i>slovarja</i>
-GEN.SG.M |
| 「私の/この大きい辞書」 | | | | | |
| b. <i>moja/èta</i>
my/this-NOM.F.SG | <i>bol'saja</i>
big-NOM.F.SG | <i>kniga;</i>
book-NOM.F.SG | <i>moej/ètoj</i>
-GEN.SG.F | <i>bol'soj</i>
-GEN.SG.F | <i>knigi</i>
-GEN.SG.F |
| 「私の/この大きい本」 | | | | | |
| c. <i>moe/èto</i>
my/this-NOM.N.SG | <i>bol'soe</i>
big-NOM.N.SG | <i>zerkalo;</i>
mirror-NOM.N.SG | <i>moego/ètogo</i>
-GEN.SG.N | <i>bol'sogo</i>
-GEN.SG.N | <i>zerkala</i>
-GEN.SG.N |
| 「私の/この大きい鏡」 | | | | | |
| d. <i>moi/èti</i>
my/this-NOM.PL | <i>bol'sie</i>
big-NOM.PL | <i>slovari;</i>
dictionary-NOM.PL | <i>moix/ètix</i>
-GEN.PL | <i>bol'six</i>
-GEN.PL | <i>slovarej</i>
-GEN.PL |
| 「私の/これらの大きな辞書」 | | | | | |

- (11) [NP [AP my/this] [N' [AP big] [N dictionary]]]

2.3 数詞句内部の格表示と数詞句主語と述語の一致の観点から

2.3.1 数詞句内部の格表示

- ・ロシア語において、数詞句³ (e.g., *five books*)は形態統語的に複雑な様相を呈している。

- (12)
- | | | | | |
|---------------------------------|----------------------------------|---|----------------------------|--|
| a. <i>pjat'</i>
five-NOM/ACC | <i>jazykov</i>
languages-GENQ | / | <i>*jazyki</i>
-NOM/ACC | ←構造格環境：数詞は主格/対格、名詞は数量属格 (genitive of quantification) |
| b. <i>pjat'ju</i>
five-INS | <i>jazykami</i>
languages-INS | / | <i>*jazykov</i>
-GENQ | ←語彙格環境：数詞、名詞どちらも同じ格 ⁴ |
- 「5つの言語」

- ・(12a)のパターンは heterogeneous な格のパターン、(12b)は homogeneous な格のパターン。この2つの格のパターンをどう導くか、そしてどのような句構造を設定すべきかという点で現在も議論が続いている(Babby 1987, Franks 1995, Pereltsvaig 2006, Bailyn 2012, Pesetsky 2013 など)。
- ・Babby (1987): 格は句の最大投射に付与され、その後付与された格の素性の値が句の内部に浸透 (percolate)。また、下記の格の優先順序の階層を提案。

- (13) Lexical Case > Genitive of Quantification > Nominative/Accusative (Babby 1987: 116)

- ・極小主義プログラムの枠組みでは、“下から上へ” 併合によって“順次”構造が構築される。

⇒heterogeneous なパターンは問題ないが homogeneous なパターンで格素性の値の上書きが必要になる⁵。

³ 以下、[数詞+名詞句]から成る句に関して、その最大投射が何であるかについては議論しない場合「数詞句」と呼ぶ。一方、最大投射が論点となる場合には、DP, NumP (Numeral Phrase)のような表記をする。

⁴ 数量属格と属格を区別する根拠の1つとして、名詞を後ろから修飾する属格名詞句は主要部名詞の格に関わらず、属格のままであることが挙げられる。

(i) a. *kniga studenta* b. *knige { studenta / *student }*
book-NOM student-GEN book-DAT student-GEN -DAT
「学生の本」

⁵ 以下、二重線は格付与を、点線は格素性の値の浸透を表す。

- (14) On kupil pjat' knig. ←動詞 *kupit'* 「買う」は対格支配。
 he bought five-ACC books-GENQ
 「彼は5冊の本を買った」

- (15) a. [NumP [Ø] [Num [Ø] five] [NP [GENQ] books]] b. [VP [V bought] [NumP [ACC] [Num [ACC] five] [NP [GENQ] books]]]

- (16) On vladeet pjat'ju jazykami. ←動詞 *vladet'* 「マスターしている」は具格支配。
 he master five-INS languages-INS
 「彼は5つの言葉をマスターしている」

- (17) a. [NumP [Ø] [Num [Ø] five] [NP [GENQ] languages]] b. [VP [V master] [NumP [INS] [Num [INS] five] [NP [GENQ]→[INS] languages]]]

- ・(17b): V が NumP に具格を付与し、その値が Num に浸透する。NP は既に数量属格が付与されているが適格な格表示を得るためには、格の階層により数量属格を具格に上書きする必要がある。
- ⇒一度決定した格の値を派生の後の段階で上書きするのは経済的ではなく、理論的に望ましくない。
- ・後藤 (2019), Goto (2020): 構造格/語彙格環境いずれでも Num は NP へ格付与をしないことを主張。さらに、節点 NumP で以下の書き換え規則を提案。

- (18) Str. Case⇒genq_+[範疇素性 *num*]

- ・上記の規則は、節点 NumP が持つ範疇素性 *num* により構造格(=主格/対格)が数量属格に書き換えられるというもの。その結果、数量属格の値が数詞にも名詞にも浸透する(19a)。
- ←従来数詞の主格/対格と考えられていた語形は数量属格形ということ。また、この規則は構造格にのみ言及しているため、語彙格が付与される場合(19b)は、そのまま数詞句内部に浸透する(=派生の後の段階で格の上書きが生じない)。

- (19) a. [NumP [Str. Case]→[GENQ] [Num [GENQ]] [NP [GENQ]]] b. [NumP [Lex. Case] [Num [Lex. Case]] [NP [Lex. Case]]]

- ・一方で、数詞に先行する所有代名詞・指示代名詞や *poslednij* 「最近の、この前の」、*pervyj* 「1 番目の」等の形容詞(以下、*poslednij* タイプの形容詞)の格表示については誤った予測をする⁶。

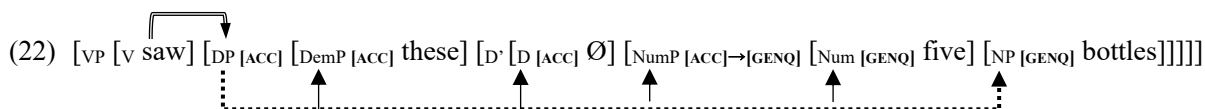
- (20) a. Ja vypil { *poslednie* / **poslednix* } pjat' bol'six butylok vina.
 I drank last-ACC -GENQ five-GENQ big-GENQ bottles-GENQ wine-GEN
 「私は最後の5本の大きなボトルのワインを飲んだ」 (Babby 1987: 118)
- b. Ja uvidel { *èti* / **ètix* } pjat' butylok.
 I saw these-ACC -GENQ five-GENQ bottles-GENQ
 「私はこれらの5本のボトルを見た」 (Babby 1987: 109)

- (21) *[VP [V saw] [NumP [ACC]→[GENQ] [DemP [GENQ] these] [Num' [Num [GENQ] five] [NP [GENQ] bottles]]]]]

- ・(21): 所有代名詞・指示代名詞や *poslednij* タイプの形容詞が NumP の指定部に位置すると考えると、節点 NumP から数量属格の値が指定部にも浸透し、誤って非文を適格文だと予測してしまう。
- ⇒顕在的な冠詞のないロシア語においても名詞句の最大投射は DP だと考えてはどうか。

⁶ 以下、数詞のグロスに関しては後藤(2019), Goto (2020)の提案に基づき、構造格環境において NOM/ACC ではなく GENQ と表記する。

⇒Pesetsky (2013)にならい、所有代名詞・指示代名詞や *poslednij* タイプの形容詞は DP の指定部に位置し、D は音声的に空だと考える。また、構造格から数量属格への書き換えのトリガーは「範疇素性 *num*」としたが、ロシア語において形容詞等は性・数で一致が起こるものの範疇では一致が起きないことから、DP のレベルにある要素は格の書き換えの対象とはならないと考える。



2.3.2 数詞句主語と動詞の一致

- ロシア語の動詞は、通常過去時制において主語の性・数に合わせて一致するが、数詞句が主語の場合、複数形の場合とデフォルトの中性・単数形の場合がありうる。

(23) *Vošli* / *Vošlo* *pjat'* *devušek*.
 entered-PL / -N.SG five-GENQ girls-GENQ
 「5人の女性が入った」

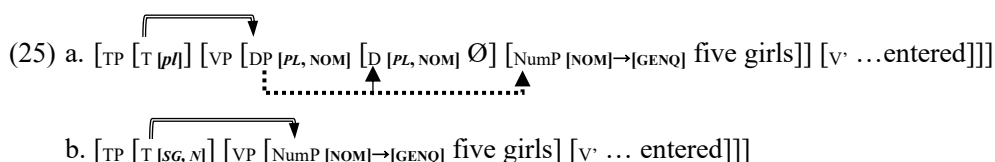
(Corbett 2006: 25)

- Franks (1995), Pereltsvaig (2006): 動詞が複数形で一致可能なのは DP のみと考え、(24a)では主語の数詞句に DP の投射がある。一方、主語の数詞句にDP がない場合(24b)は、デフォルトの中性・単数形になると考えた。

(24) a. [DP Ø [NumP [Num five] [NP girls]]] b. [NumP [Num five] [NP girls]]

- Goto (in preparation):

- Franks (1995), Pereltsvaig (2006)にならい、動詞が複数形で一致可能なのは DP のみとする。
- 動詞が一致していない場合は主語の最大投射が DP ではなく NumP とする。ただし、動詞が一致していなくても主格の付与自体は行われると考える(その結果、節点 NumP で数量属格に書き換えが起こる)。

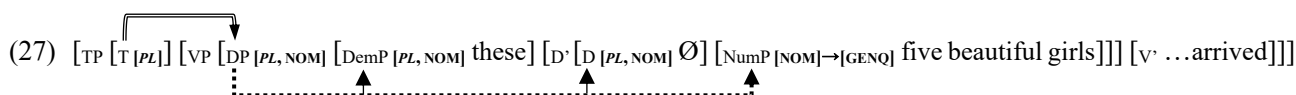


- (25a): 主語の数詞句は DP なので、動詞(正確には T)は DP と一致し複数形。T から主格が DP に付与され、節点 NumP で数量属格へ書き換えられる。
- (25b): 主語の数詞句は NumP なので、動詞は一致できず中性・単数形に。ただし、T から主格の付与は行われるので、節点 NumP で数量属格に書き換えられる。
- 数詞の左側に主格の所有代名詞・指示代名詞、*poslednij* タイプの形容詞があると、動詞は複数形の一致のみ許容される。

(26) *Èti* *pjat'* *krasivyx* *devušek* *prišli/*prišlo*.
 these-NOM five-GENQ beautiful-GENQ girls-GENQ arrived-PL/-N
 「これらの5人の美しい女性がやって来た」

(Franks 1995: 100)

⇒このパターンは、これまでに提示した(i) 動詞が複数形で一致出来るのは DP のみで、(ii) 所有代名詞等は DP の指定部に位置する、という2つの想定から導くことが出来る。



- ・(27): 指示代名詞があるということは DP の投射があるということになるため、動詞は複数形での一致が可能となる。また T からは主格が DP に付与され、DP 内の要素には主格の値が浸透する。

3. まとめ

- ・英語の名詞句の研究では、名詞句の最大投射を DP と考える研究が主流だが、顕在的な冠詞のないロシア語においては DP が NP より上に存在するか議論が分かれる。
 - ・英語の研究をロシア語に安易に受け入れてしまうと、宮内の研究が示したような両言語間の束縛現象の違いが説明出来ない。
 - ・一方、英語の研究がなければ、ロシア語の名詞句の最大投射を DP と考え得る議論はそもそも発生しなかったとも考えられる。後藤の研究のように、数詞句内部の格表示や数詞を含む主語と動詞の一致の観点からは DP の投射がロシア語にも存在するという考えは、英語学の研究がなければ出てこなかっただろう。
- ⇒現時点でロシア語において DP の有無は決定できないが、ロシア語に DP がないとすると、英語学の研究はロシア語名詞句研究に負の影響を与えたことになり、一方で DP があるとすると正の影響を与えたことになる。今後、より詳細な研究を通してロシア語名詞句の構造を明らかにする必要がある。

引用文献一覧

- ◇ Abney, S. 1987. The English noun phrase in its sentential aspect. Doctoral dissertation, MIT. ◇ Babby, L. 1987. Case, prequantifiers, and discontinuous agreement in Russian. *Natural Language and Linguistic Theory* 5:91-138. ◇ Bailyn, J. 2012. *The syntax of Russian*, Cambridge: Cambridge University Press. ◇ Bošković, Ž. 2005. On the locality of left branch extraction and the structure of NP, *Studia Linguistica* 59:1-45. ◇ Bošković, Ž. 2008. What will you have, DP or NP? In *Proceedings to the 37th Annual Meeting of the North-Eastern Linguistic Society*, 101-114. Amherst: GSLA Publications. ◇ Bošković, Ž. 2009. More on the no-DP analysis of article-less languages. *Studia Linguistica* 63:187-203. ◇ Chomsky, N. 1986. *Barriers*. Cambridge: MIT Press. ◇ Corbett, G. 2006. *Agreement*. Cambridge: Cambridge University Press. ◇ Despić, M. 2013. Binding and the structure of NP in Serbo-Croatian. *Linguistic Inquiry* 44:239-270. ◇ Franks, S. 1995. *Parameters of Slavic morphosyntax*. New York: Oxford University Press. ◇ Fukui, N. and M. Speas. 1986. Specifiers and projection. *MIT Working Papers in Linguistics* 8:128-172. ◇ Goto, Y. 2020. Some remarks on agreement in animacy in Russian. *Roshiago Kenkyu* 30:57-87. ◇ Goto, Y. in preparation. Predicate agreement alternation with numeral phrases in Russian. ◇ Kayne, R. 1994. *The antisymmetry of syntax*. Cambridge: MIT Press. ◇ Miyacuh, T. 2018. Syntactic structures of relative clauses in Russian: A view from binding phenomena. *Roshiago Kenkyu* 28:105-128. ◇ Miyauchi, T. 2020. How to introduce instrumental agents: Evidence from binding in Russian event nominal phrases. In *Advances in Formal Slavic Linguistics 2017*, 179-204. Berlin: Language Science Press. ◇ Pereltsvaig, A. 2006. Small nominals. *Natural Language and Linguistic Theory* 24:433-500. ◇ Pereltsvaig, A. 2007. The universality of DP: A view from Russian. *Studia Linguistica* 61:59-94. ◇ Pesetsky, D. 2013. *Russian case morphology and the syntactic categories*. Cambridge: MIT Press. ◇ 後藤雄介. 2019. 「ロシア語における数詞句と格付与について」『日本言語学会第 159 回大会予稿集』 ◇ 宮内拓也. 2015. 「束縛現象とロシア語名詞句の統語構造」『スラヴ文化研究』 13:69-106. ◇

何を受動文と呼ぶか・呼ばないか？ (What to call or not to call a passive sentence?)

野元 裕樹 (Hiroki Nomoto)

東京外国語大学 (Tokyo University of Foreign Studies)

1 はじめに

(1) マレー語

- a. マレーシア、シンガポール、ブルネイの国語・公用語（標準マレー語）
- b. インドネシアの国語・公用語となっているマレー語＝「インドネシア語」
— 例文は断りのない限り標準マレー語
- c. 系統：Austronesian > Western Malayo-Polynesian
- d. 語順：SVO, NA
- e. 形態類型：膠着的

- 1. マレー語で受動文の候補となる構文のうちどれを「受動文」と呼ぶかについて、
 - 英語の受動文の特徴が基準とされる傾向
 - 英語による研究と現地語による研究で乖離
- 2. マレー語の受動文を英語の受動文に似せて分析する傾向

2 英語の受動文

本発表では形式的定義を採用する。

(2) **Carnie** (2021:230)

- a. Voice refers to a phenomenon that changes the number of arguments and position of arguments that a verb uses.
- b. In a *passive*, such as *The beef waffles were eaten*, the theme appear in the subject position. The agent is either mentioned after a preposition (like *by Calvin*) or is omitted entirely.
- c. In English, the passive voice is marked with a *be* auxiliary and the participle form of the verb. [...] Active sentences bear no special marking.

(3) 受動文の認定指標

- a. 被動者の主語化
- b. 動作主の背景化
- c. 有標の動詞形

- (4) a. Calvin ate the beef waffles. → Active
- b. The beef waffles were eaten (by Calvin). → Passive
- c. They ate the beef waffles. → **Active**

3 マレー語で「受動文」と記述される構文

- | | | |
|-------------------|-------------|------------------|
| 1. di-受動文／受動文 1 型 | 3. kena 受動文 | 5. ber-受動文 |
| 2. 裸受動文／受動文 2 型 | 4. ter-受動文 | 6. ke-...-an 受動文 |

- ber-受動文と ke-...-an 受動文は対応する能動文を持たないので、厳密には受動文ではない。
- その他の受動文はいずれも英語の受動文の認定指標 (3) からすると問題を含む。

4 英語の視点から見たマレー語「受動文」

4.1 kena 受動文と ter-受動文

被動者の主語化	動作主の背景化	有標の動詞形
yes	yes	no

- 動詞の形態が変化しない covert voice alternation (Nomoto and Kartini 2012)。
- kena, ter-自体は、モダリティの標識であり、態の標識ではない。
 - *kena*: ‘regardless of the subject/speaker’s own will’, ‘pressed by external circumstances’, ‘destined to’
 - *ter-*: nonvolitional, accidental

(5) kena 受動文

Saya kena **tipu** (oleh perempuan itu).
 1SG KENA cheat by woman that
 ‘I was cheated (by the woman).’

(6) kena 能動文

Perempuan itu kena **tipu** saya.
 woman that KENA cheat 1SG
 ‘The woman had to cheat me.’

(7) ter-受動文

Kek saya **ter-makan** (oleh adik).
 cake 1SG TER-eat by younger.sibling
 ‘I had my cake eaten (by my younger brother/sister).’

(8) ter-能動文

Adik **ter-makan** kek saya.
 younger.sibling TER-eat cake 1SG
 ‘My younger brother/sister ate my cake by mistake.’

- 認定指標を満たさないものの、受動文としての認定が問題とされることはない。

4.2 裸受動文

被動者の主語化	動作主の背景化	有標の動詞形
yes	no	no

(9) 能動文

Mereka sudah semak/meny-[s]emak dokumen itu.
 3PL already check/ACT-check document that
 ‘They have already checked the document.’

(10) 裸受動文／受動文 2 型

Dokumen itu sudah *(mereka) semak.
document that already 3PL check
'They have already checked the document.'

- 初期の英語による研究では、この構文を受動文として認めていた (e.g. Chung 1976)。
- しかし、Arka and Manning (1998) 以降、英語による研究ではこの構文を受動文とは別の目的語態 (object voice) とみなす見方が次第に優勢になった (e.g. Cole et al 2008; McKinnon et al 2011; Sato 2012; Legate 2014; Jeoung 2020)。
- 一方、現地語による研究ではこの構文を受動文の下位種とみなす見方が浸透している。

(11) 裸受動文の特徴

- 動詞は語幹の形
- 動作主は動詞のすぐ隣に生起
- 動作主は 1・2 人称人称代名詞が中心^{*1} (他の形式は小さいもののみ可能 (Nomoto 2021))
- 動作主は主語的性質も示す [13]

(12) 裸受動文の構造

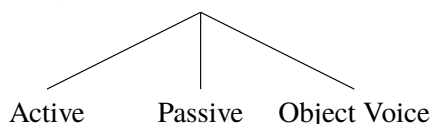
[_{TP} Theme [_{T'} T [_{VP} Agent [_{V'} v [_{VP} V <Theme>]]]]]

(13) インドネシア語 (Arka and Manning 1998)

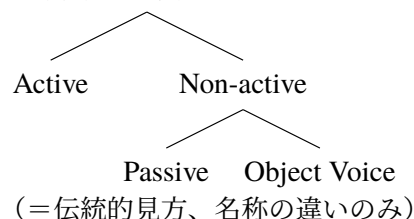
Diri=nya_i mesti dia_i serahkan ke polisi.
self=3 must 3SG surrender to police
'S/he must surrender herself/himself to the police.'

(14) 目的語態を立てる場合の態体系

a. 三項対立



b. 二項対立+下位タイプ



(=伝統的見方、名称の違いのみ)

4.3 di-受動文

(15) di-受動文の下位タイプ

- Dokumen itu sudah di-semak **oleh mereka**.
- Dokumen itu sudah di-semak.
- Dokumen itu sudah di-semak **mereka**.
document that already PASS-check by 3PL
'The document has already been checked (by them).'

^{*1} そのため、pronominal passive と呼ばれる (e.g. Aldridge 2008)。

被動者の主語化	動作主の背景化	有標の動詞形
yes	(15a–b) yes, (15c) no?	yes

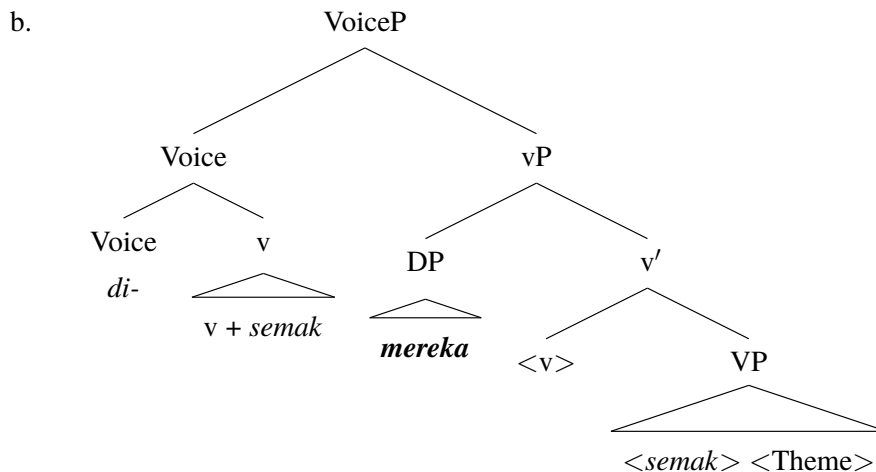
前置詞 **oleh** のない **di-**受動文 (15c) をどう分析するか？

(16) PP 説 — 優勢 (e.g. Jeoung and Biggs 2017)

- a. Dokumen itu sudah di-semak [PP **oleh/Ø mereka**].
document that already PASS-check (by) 3PL
'The document has already been checked by them.'
- b. 動作主は付加詞 — 動作主の背景化 yes

(17) DP 説 — 発表者のみ？ (Nomoto 2015, 2021)

- a. Dokumen itu sudah di-semak [DP **mereka**].
document that already PASS-check 3PL
'The document has already been checked by them.'



- c. 動作主は項 — 動作主の背景化 no

(18) 動作主は動詞のすぐ隣に生起 — 裸受動文と共通 cf. (11b)

- a. *Dokumen itu sudah di-semak *dengan teliti* **mereka** .
document that already PASS-check with careful 3PL
(Intended: 'The document has already been checked carefully by them.')
- b. ***Mereka** dokumen itu sudah di-semak.
3PL document that already PASS-check
(Intended: 'By them the document has already been checked.')

(19) a. Dokumen itu sudah di-semak *dengan teliti* **oleh mereka** .

b. **Oleh mereka** dokumen itu sudah di-semak.

(20) (18) に対する説明

- a. PP 説: P omission/null P is licensed by V.
- b. DP 説: Agent DP = ergative; ergative extraction is cross-linguistically restricted.

- 前置詞 *oleh* なしで生起する動作主が項なのか付加詞なのかを区別する有効なテストはない (Chen and McDonnell 2019)。
- にもかかわらず、PP 説が支持されるのは英語の視点によるものか？

5 ハイブリッド型受動文

- 古典マレー語の di-受動文には動作主が動詞の直後の 3 人称代名詞と *oleh* 前置詞句により二度表されるタイプが存在。
- Nomoto (2016) は、これを動作主の接語重複と分析。
 - 動詞に隣接する DP = 項
 - *oleh* 前置詞句 = 付加詞

- (21) *oleh ibu bapa=ku di-jemputkan=nya=lah segala adik kakak dalam Melaka*
by mother father=my PASS-invite=3=PART all sibling in Malacca
 ‘my parents invited all their siblings in Malacca’ (Abd.H 32:4)

- マレー系言語のブスマ語では、di-受動文だけでなく、裸受動文もハイブリッド型を持つ⁸²。

- (22) ブスマ語 [本発表の分析/原著者の分析]
- a. Puntung la=udim **di-tetaki=nye li Raffles**.
 firewood PFV=finish DI-chop=3 by Raffles
 ‘Raffles already chopped the firewood.’ (Chen and McDonnell 2019) [di-受動文/被動者態]
- b. langsung **ku=tulakka li=ku**
 direct 1SG=push by=1SG
 ‘I pushed (him) right away’ (McDonnell 2016:141) [裸受動文/被動者態]

6 まとめ

構文	被動者の主語化	動作主の背景化	有標の動詞形	英語の視点からの分析
裸受動文	yes	no	no	「目的語態」≠ 受動文
di-受動文 <i>oleh</i> あり	yes	yes	yes	受動文
di-受動文 <i>oleh</i> なし	yes	no	yes	P omission/null P

マレー語と関連言語の視点

- di-受動文でも裸受動文でも [1] 動作主が動詞のすぐ隣に生起し、[2] すぐ隣の動作主を前置詞句で重複することが可能
- di-受動文の動作主は主に 3 人称、裸受動文の動作主は主に 1・2 人称（機能的相補分布）
- 以上から、2 つの構文は同一の態の下位タイプとするのが妥当
 → 受動文の認定指標 ⁸³ のうち「被動者の主語化」さえ満たしていれば、「受動文」と呼ぶ⁸³

⁸² ただし、Chen and McDonnell (2019) はハイブリッド型の di-受動文を被動者態 (Undergoer Voice; ≈ 目的語態) と同一視し、受動文とは見なしていない。これも英語の視点によるものか？

⁸³ 英語の受動文もそれでよい。しかし、ドイツ語の非人称受動文 (Es wird hier getanzt. ‘Dancing takes place here.’) や日本語の間

cf. Legate (2021) も同じ見解で、3つの認定指標すべては満たさないものを noncanonical passive と呼び、受動文のうちに入れている（形式的特徴のみによるプロトタイプの定義）。

参考文献

- Aldridge, Edith. 2008. Phase-based account of extraction in Indonesian. *Lingua* 118:1440–1469.
- Arka, I Wayan, and Christopher D. Manning. 1998. Voice and grammatical relations in Indonesian: A new perspective. In *Proceedings of the LFG98 Conference*, ed. Mirriam Butt and Tracy Holloway King. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Carnie, Andrew. 2021. *Syntax: A Generative Introduction*. Oxford: Wiley-Blackwell, 4th edition.
- Chen, Victoria, and Bradley McDonnell. 2019. Western Austronesian voice. *Annual Review of Linguistics* 5:173–195.
- Chung, Sandra. 1976. On the subject of two passives in Indonesian. In *Subject and Topic*, ed. Charles N. Li, 57–99. New York: Academic Press.
- Cole, Peter, Gabriella Hermon, and Yanti. 2008. Voice in Malay/Indonesian. *Lingua* 118:1500–1553.
- Jeoung, Helen. 2020. Categorical ambiguity in *mau*, *suka*, and other Indonesian predicates. *Language* 96:e157–e172.
- Jeoung, Helen, and Alison Biggs. 2017. Variants of Indonesian prepositions as intra-speaker variability at PF. *University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics* 23.
- Legate, Julie Anne. 2014. *Voice and v: Lessons from Acehnese*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Legate, Julie Anne. 2021. Noncanonical passives: A typology of voices in an impoverished Universal Grammar. *Annual Review of Linguistics* 7:157–176.
- McDonnell, Bradley James. 2016. Symmetrical Voice Constructions in Besemah: A Usage-Based Approach. Doctoral Dissertation, University of California, Santa Barbara.
- McKinnon, Timothy, Peter Cole, and Gabriella Hermon. 2011. Object agreement and ‘pro-drop’ in Kerinci Malay. *Language* 87:715–750.
- Nomoto, Hiroki. 2015. Person restriction on passive agents in Malay and givenness. In *Proceedings of the Second International Workshop on Information Structure of Austronesian Languages*, 83–101. Tokyo: Tokyo University of Foreign Studies.
- Nomoto, Hiroki. 2016. Passives and clitic doubling: A view from Classical Malay. In *AFLA 23: The Proceedings of the 23rd Meeting of the Austronesian Formal Linguistics Association*, ed. Hiroki Nomoto, Takuya Miyauchi, and Asako Shiohara, 179–193. Canberra: Asia-Pacific Linguistics.
- Nomoto, Hiroki. 2021. Bare passive agent hierarchy. In *Proceedings of the Twenty-Seventh Meeting of the Austronesian Formal Linguistics Association*, ed. Henrison Hsieh and Keely New, 57–70. Ontario: University of Western Ontario.
- Nomoto, Hiroki, and Kartini Abd. Wahab. 2012. Kena adversative passives in Malay, funny control, and covert voice alternation. *Oceanic Linguistics* 51:360–386.
- Sato, Yosuke. 2012. Successive cyclicity at the syntax-morphology interface: Evidence from standard Indonesian and Kendal Javanese. *Studia Linguistica* 66:32–57.

接受動文なども同じ受動文の構文であるとする、「被動者の主語化」だけではうまく行かない。

英語と世界の言語の与格交替*

(English dative alternation from a crosslinguistic perspective)

長屋尚典 (Naonori Nagaya)

東京大学 (The University of Tokyo)

1 はじめに

- **交替 (alternation)**: だいたい同じ意味をもつ複数の構文が存在すること
- **英語の与格交替 (dative alternation)**
 - “[T]he Dative alternation represents a possibility for speakers to say something in two different ways.” (Hilpert 2019: 187)
- (1) a. ditransitive construction:
caused possession (A causes R to have T)
- b. prepositional dative construction:
caused motion (A causes T to move to R)
- (2) English dative alternation (Hilpert 2019: 45)
 - a. John gave Mary the book. [ditransitive construction]
 - b. John gave the book to Mary. [prepositional dative construction]
- (英語の) 与格交替の言語理論における重要性
 - なぜ同じことをいうのに複数の構文が存在するのか?
 - “Both member constructions of the Dative alternation can be used to express the idea of a transfer. This does not mean that the two constructions are seen as semantically equivalent. [...] Given that alternative ways of saying things are usually not random but governed by linguistic and social determinants, it makes sense to investigate the conditions under which speakers choose either one or the other of the two constructions.” (Hilpert 2019: 187)
- 英語の与格交替は言語学においてもっとも研究されているテーマの一つ
 - “The study of language encompasses the fields of phonology, morphology, semantics, and the dative alteration.” (John W. Du Bois)
 - さまざまなアプローチ
 - * 生成文法
 - * 構文文法
 - * 言語類型論
- 英語の与格交替の要因 (Hilpert 2019 によるまとめ; cf. Bresnan et al. 2007):
 - 英語の与格交替にさまざまな要因が関わっている (Hilpert 2019: 189–191)
 - 情報構造

* 本稿に関する内容については大谷直輝先生をはじめとしてシンポジウム参加の先生方から貴重なご意見をいただいた。言うまでもなく本稿に残るいかなる誤りも著者の責任である。なお、本研究は JSPS 科研費 JP21K00522 の助成を受けたものである。

- * theme が given ならば Prepositional dative construction が好まれる
- * recipient が given ならば Ditransitive construction が好まれる
- 統語論的要因
 - * 代名詞
 - ・ recipient が代名詞ならば Ditransitive construction が好まれる
 - ・ Ditransitive construction で theme が人称代名詞なのは許されない
 - * 定・不定
 - * 項の長さ
 - ・ 長い theme ならば Ditransitive construction が好まれる
 - ・ 長い recipients ならば Prepositional Dative construction が好まれる
- 意味的要因
 - * 動詞の意味
 - * 有生性
- プライミングなど

(3) (Hilpert 2019: 188)

A: Do we have any more wine?
 B: No, I'm afraid there's nothing left.
 A: But we had that last bottle of Merlot!
 B: Yes, but . . .
 . . . I gave John that last one. [Ditransitive]
 . . . I gave that last one to John. [Prepositional Dative]

(4) (Hilpert 2019: 188)

A: Do we have any more wine?
 B: No, I'm afraid there's nothing left.
 A: But it's John's birthday and I need to bring something!
 B: Yes, well . . .
 . . . you could give John some chocolates. [Ditransitive]
 . . . you could give some chocolates to John. [Prepositional Dative]

(5) (Hilpert 2019: 189)

- a. You could give him some chocolates. [Ditransitive]
- b. *You could give John it. [Ditransitive]

(6) (Hilpert 2019: 189)

- a. This light gives me a headache. [Ditransitive]
- b. ?This light gives a headache to me. [Prepositional Dative]

(7) (Hilpert 2019: 190)

- a. *John threw the floor his keys. [Ditransitive]
- b. John threw his keys to the floor. [Prepositional Dative]

- 本発表の目標
 - 英語の与格交替を世界の言語のなかで見直す
 - * 英語の与格交替は世界的には珍しい現象である
 - * 英語の与格交替は適用態など複他動詞のかかわる交替・派生現象と似ている
 - 英語の与格交替研究の観点からみたオーストロネシア諸語の与格交替
 - * ラマホロット語には与格交替はあるが英語で提案された要因は有効ではない (Nagaya 2014)
 - * タガログ語は与格交替はないが英語で提案されたものと同じような要因が有効である (Nagaya in preparation)

2 世界の言語からみた英語の与格交替

- 英語の与格交替は比較的珍しい現象
 - “Languages employ a number of different ways of representing the R and the T in ditransitive clauses. English, in fact, has two common constructions [...] Many other languages employ constructions which are similar to one or the other of these two constructions in English, though it is less common to have both constructions, the way English does.” (Dryer 2007: 254)
 - Siewierska (1998): only 12 out of a sample of 219 languages (approximately 6%).
- 英語の与格交替に関係する構文 (cf. Haspelmath 2015; Zúñiga & Kittilä 2019)
 - 適用態
 - 動詞連続構文
 - 補助動詞構文

(8) Indonesian (Sneddon et al. 2010: 102)²

- Ibu mem-beri anak=nya baju baru.
mother AV-give son=DEF shirt new
‘Mother gave her son a new shirt.’
- Ibu mem-beri-kan baju baru kepada anak=nya.
mother AV-give-APPL shirt new to son=DEF
‘Mother gave a new shirt to her son.’

(9) Thai (Malchukov et al. 2010: 13–14; cf. Thepkanjana 2010)

- Song cotmaay hay chan.
send letter give 1SG
‘(S/he) sent me a letter.’
- Song cotmaay pay Krungthep.
send letter go Bangkok

² 本稿で用いる略号は以下の通り: APPL-applicative, AV-actor voice, CV-circumstantial voice, DEF-definite, DEM-demonstrative, DIS-distal, GEN-genitive, LK-linker, LOC-locative, LV-locative voice, NMLZ-nominalization, NOM-nominative, RL-realis, SG-singular, < >-infix, ”=”-cliticized.

‘(S/he) sent a letter to Bangkok.’

3 英語からみた世界の言語の与格交替

3.1 ラマホロット語の与格交替

- ラマホロット語には英語タイプの与格交替が存在する
- ただし、この交替を示す動詞はかなり限定されている
 - GIVE-verb (neĩ ‘give’, sorō ‘give’)
 - TELL-verb (tutu ‘tell’, marĩ ‘say’)
 - TEACH-verb (adʒa ‘teach’)
 - SHOW-verbs (nonĩ ‘show’, pro ‘show something to eat or drink’)
- 交替の要因
 - 統語的には何を Primary Object (→ indexing, 関係節化, 主題化 etc.) にするかという選択が関与している
 - 意味的には英語で提案されている要因がまったく有効ではない

(10) Lamaholot (Nagaya 2014: 227)

- a. go neĩ Nia buku.
1SG give Nia book
‘I gave Nia a book.’
- b. go neĩ buku ia Nia.
1SG give book LOC Nia
‘I gave a book to Nia.’

(11) Lamaholot (Nagaya 2014: 232)

go neĩ peʔẽ ia mo.
1SG give DEM.DIS.NMLZ LOC 2SG
‘I will give that/it to you.’

(12) Lamaholot (Nagaya 2014: 232)

go neĩ mo peʔẽ.
1SG give 2SG DEM.DIS.NMLZ
‘I will give you it.’

3.2 タガログ語の「与格ヴォイス」

- タガログ語のヴォイス:
 - 複他動詞の agent, theme, recipient どの要素も主格 (≡ 主語) になる
 - どの動詞も同じように有標である (symmetrical voice, Himmelmann 2005)
 - どれもだいたい同じような意味を持っている (cf. 二項述語)
- どのような要因がこの交替を決めているのか?

- 統語的には何を主格にするか (→ 関係節化 etc.) という選択が関与している

(13) Tagalog

- Nag-bigay ang= babae ng= pera sa= bata. [Actor Voice (A pivot)]
AV.RL-give NOM= woman GEN= money LOC= child
‘The woman gave money to the child.’
- I-b<in>igay ng= babae ang= pera sa= bata. [Circumstantial Voice (T pivot)]
CV-give<RL> GEN= woman NOM= money LOC= child
‘The woman gave the money to the child.’
- B<in>igy-an ng= babae ng= pera ang= bata. [Locative Voice (R pivot)]
give<RL>-LV GEN= woman GEN= money NOM= child
‘The woman gave the child money.’

- コーパスを利用した研究 (Nagaya in preparation)
 - possessive transfer verbs (bigay ‘give’ and alay ‘offer’)
 - cognitive transfer verbs (turo ‘show’ and balita ‘inform’)
- 結果
 - 結果 1: Locative Voice (49.6%) > Actor Voice (32.7%) > Circumstantial Voice (17.7%)
 - * 被動者が優先的に主語になると考えられていたことからすると意外な結果になった
 - 結果 2: A と R の anaphoricity が交替の選択に有意な効果があった
 - * LV が選択される推定確率は 0.26 (R が省略)、0.87 (R が代名詞)、0.67 (R が語彙的名詞)
 - 結果 3: 非対称的な referential prominence (Haspelmath 2021) を見せる
 - * 他の言語と同じように A と R の referential prominence が高い (図 1, 2 & 3)

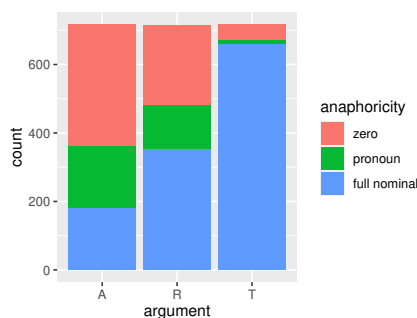


図1 Anaphoricity of A/T/R

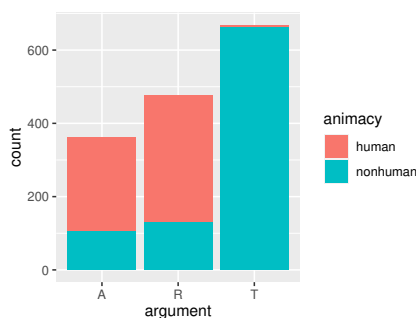


図2 Animacy of A/T/R

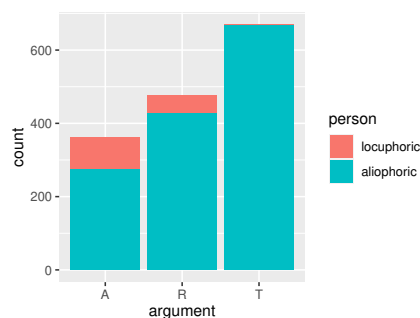


図3 Person of A/T/R

4 おわりに

- 英語の与格交替を世界の言語のなかで見直した
- 発表者の研究の観点から英語の与格交替研究の「功罪」を考えた
- 英語の与格交替の研究は言語研究において極めて重要である
 - 優れた成果の積み重ねがある
 - 英語以外の言語の研究にも役立つ
 - 世界の言語の研究からも学ぶことがあるかもしれない

参考文献

- Bresnan, Joan, Anna Cueni, Tatiana Nikitina & R. Harald Baayen. 2007. Predicting the dative alternation. In Gerlof Bouma, Irene Krämer & Joost Zwarts (eds.), *Cognitive Foundations of Interpretation*, 69–94. Amsterdam: Royal Netherlands Academy of Science.
- Dryer, Matthew S. 2007. Clause types. In Timothy Shopen (ed.), *Language Typology and Syntactic Description: Volume 1, Clause Structure*, 224–275. 2nd edn. Cambridge: Cambridge University Press.
- Haspelmath, Martin. 2015. Ditransitive constructions. *Annual Review of Linguistics* 1(1). 19–41.
- Haspelmath, Martin. 2021. Role-reference associations and the explanation of argument coding splits. *Linguistics* 59(1). 123–174.
- Hilpert, Martin. 2019. *Construction Grammar and Its Application to English*. 2nd edn. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Himmelman, Nikolaus P. 2005. The Austronesian languages of Asia and Madagascar: typological characteristics. In K. Alexander Adelaar & Nikolaus P. Himmelman (eds.), *The Austronesian Languages of Asia and Madagascar*, 110–181. London: Routledge.
- Malchukov, Andrej L, Martin Haspelmath & Bernard Comrie (eds.). 2010. Ditransitive constructions: A typological overview. In Andrej Malchukov, Martin Haspelmath & Bernard Comrie (eds.), *Studies in Ditransitive Constructions: A Comparative Handbook*, 1–64. Berlin: De Gruyter Mouton.
- Nagaya, Naonori. 2014. Ditransitives and benefactives in Lamaholot. In I Wayan Arka & N. L. K. Mas Indrawati (eds.), *Argument Realisations and Related Constructions in Austronesian Languages: Papers from 12-ICAL*, Volume 2, 227–245. Canberra: Asia-Pacific Linguistics.
- Nagaya, Naonori. In preparation. Ditransitive alternations in the Tagalog symmetrical voice system. The 14th International Conference of the Association for Linguistic Typology, University of Texas at Austin, Austin, December 15–17, 2022.
- Siewierska, Anna. 1998. Languages with and without objects: The functional grammar approach. *Languages in Contrast* 1(2). 173–190.
- Sneddon, James N., Alexander Adelaar, Dwi Noverini Djenar & Michael C. Ewing. 2010. *Indonesian Reference Grammar*. 2nd edn. St Leonards, NSW: Allen & Unwin.
- Thepkanjana, Kingkarn. 2010. Ditransitive constructions in Thai. In Andrej Malchukov, Martin Haspelmath & Bernard Comrie (eds.), *Studies in Ditransitive Constructions: A Comparative Handbook*, 409–426. Berlin: De Gruyter Mouton.
- Zúñiga, Fernando & Seppo Kittilä. 2019. *Grammatical Voice*. Cambridge: Cambridge University Press.